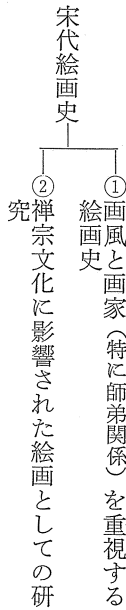


北碕居簡の文化的素地について

道 津 綾 乃

一、はじめに——南宋代の絵画史研究の動向——

筆者は中国南宋代（一二二八～一二七二）の絵画史に興味がある。一口に南宋代の絵画といっても、着色画に水墨画、絹本・紙本に壁画等、様々な種類・様式・素材がある。また、題材は眼に見えるもの、見えないものを問わない。このような幅広い範囲の中で、筆者が取り上げる絵画作品は、水墨または淡彩で絹・紙に描かれた、鑑賞用と考えられる作品群である。これらは現在、次のような方向で研究されている。



両者は、元來画風・描法の変化を認めた結果生まれた学説と考えられる。両者の相違は、①画面等の様式分類、②文献解釈という方法論に端を発する。そして、両者に導き出され

る結論は、①画風の特異性とその継承・発展、②禅（禪宗・禅僧・禅思想等）の影響である。例えば、双方から研究対象とされる梁楷（未詳）という画家とその作品の研究は、まず伝記の検討からはじまる。

梁楷、東平相義之後、善畫人物・山水・道釋・鬼神。師賈師古。描写飄逸、青過於藍。嘉泰年畫院待詔、賜金帶。楷不受、挂於院內。嗜酒自樂。號曰梁風子。院人見其精妙之筆、無不敬伏。但傳於世者皆草草、謂之減筆。

〔圖繪寶鑑〕卷四

『圖繪寶鑑』は元代に成立し、同文は梁楷伝の最も古い史料の一つとされている。ここで注目されるのは、梁楷の二種類の描き方である（傍線部）。この「精妙之筆」と「減筆」の二つの特異な画風の代表例として挙げられる作品は、いずれも日本に現存している。

この二画風は、従来「精妙之筆」から「減筆」への変化と

考えるのが通例である。この変化の原因を「梁楷は師である賈師古の影響を受け、賈師古の師である李公麟の「細筆画」を精魂傾けて模写したのである。(中略)中年以降は細筆の白描を水墨の逸筆画に変え、自ら一格を成した」と考える、つまり画風の時間を伴った変化と捉える説と、元来画院待詔であった梁楷の描く絵は、李公麟―賈師古と受け継がれた「白描画」だったが、禅僧との交流により「減筆」へと変化した⁽⁵⁾、つまり禅の影響による変化とする説がある。筆者は、これらの考察にそれぞれ問題があると考えている。

まず、『圖繪寶鑑』の文章から、梁楷が年令を重ねたことで画風を変化させたとは読み取れないことが問題である。当時の院人が見て驚嘆した梁楷の絵は「精妙之筆」で描かれていたが、『圖繪寶鑑』が書かれた頃になると「減筆」のみが伝世していたのであって、梁楷が「精妙之筆」の後で「減筆」を成立させたことと記されているわけではない。さらに、現存作品には全く年記がなく、成立の順序が付けられないことも画風の「時間を伴った」変化と言いつれ切れない要因の一つである。

次に、禅の影響とする説についてだが、まず、この学説で必ず引用される『北碚詩集』⁽⁷⁾巻四の「贈御前梁宮幹」を挙げておきたい。

梁楷惜^レ墨如^レ惜^レ金^①。醉来亦復成^レ滴^レ淋^②。天籟自響或^レ自
瘖、族史閑筆空^レ沈吟。前日去^レ尋^レ趙子^③、道院水亭秋色裏^④。
幻成^レ趙子騎^レ蹇驢^⑤、瀟洒不^レ減^レ騎^レ鯨魚^⑥。又寫^レ深衣^⑦、跨^レ牛
客^⑧、雲生^レ三谷口^⑨、耕^レ阡陌^⑩。按^レ図^レ絶叫^レ喜^レ欲^レ飛^⑪、棹筆授^レ我^レ使^⑫
我^レ題^⑬。我方挂^レ眼^⑭、孤山西^⑮、岑樓殘^レ碧瀟^⑯、掃^レ肩^⑰。見^レ成^レ一段^⑱
詩中畫^⑲、宜^レ雨^⑳宜^㉑晴^㉒四時^㉓桂。輪與勝^レ王^㉔、蛟^レ嶼^㉕、座^レ収^レ少室^㉖
山人^㉗賈。

特に、傍線部①・③から減筆を禅僧北碚居簡の目前で披露したと解釈される。ここから両者の親密さが強調され、その影響を指摘されるのである。確かに、目前で描かれたのかもれない。しかし、この詩から解説できることは、禅僧との親密さから「減筆」が生まれたという証拠ではなく、梁楷は酒に酔うと水が勢いよく流れるように(滴淋)描く点(傍線②)と、北碚が自らを原因とした、または禅を原因とした梁楷の変化についてふれていない点である。『北碚文集』及び『北碚詩集』には、梁楷の作品についての記述が合計六点あるが、いずれも彼の画風の変化を示した資料はみあたらない。以上をふまえて、筆者はこう考えるのである、梁楷の「減筆」体は酒の勢いで現れるだけなのではないかと。

二、本稿の目的

梁楷の「減筆」同様、老融（または智融）の「罔兩画」や、日本でも有名な馬遠・牧谿・玉潤等の絵画についても禅との関係をうたう学説がある。こうした説が持ち上がる原因の一つに、絵画に何らかの影響を与えたとされる「禅宗文化」の存在が考えられる。

筆者は、禅僧と文人の文化面における相互の影響を認めている。例えば、北磻居簡が樓鑰の影響を大きく受けている点について、以前考察したことがあるが、北磻が持つ文化的な素養は、決して文人と異なったものではない。しかし、絵画の題跋文を比較したとき、古則・公案をベースに解釈した例を幾度となく見出し、文人にその例が見あたらないことを考え合わせると、北磻のみならず禅僧の文化、つまり「禅宗文化」の姿を再検討する必要性を見出すのである。その第一段階として、北磻居簡を具体例に、彼の文化的素地はどのように構成されていたのかを考察していきたいと思う。

本稿では、北磻の法嗣物初大観（一一〇一〜一二六八）の書いた「行状」を基に人物交渉を明らかにし、そこに文化的な交流を考えていきたい。ただし、まだ基礎研究の段階なので、問題点の提示と今後の課題を見定めることをその目的とする。

三、北磻居簡の行状

まず、北磻居簡（一一六四〜一二四六）の行状の全文を掲げる。この文章は物初大観撰『北磻續集』の卷末及び『物初贖語』卷二十四に収録されている。双方には、多少の語句の相違があるので終わりに注を付すが、内容に影響はないと思われる。ここでは前者収録本を底本とする。

①師、名居簡、字敬叟、潼川通泉龍氏。世業儒。父文宝、母楊氏、生三子、師其次也。資穎異、所業絶出。每見佛畫、必端坐默觀、如夙習。逮冠、得疾幾殆。日者謂宜披緇、緇、父母難於割愛。其姑勉之曰、是子敏慧、且耽經典。俾紹積種、誠宜。嫂趙氏尤縱與。乃依邑之廣福院圓澄師。澄度弟子二、其一則師、次則病庵居正、亦飽遊歷、出世有聲叢林中。又有壞庵居照、與師同祖、氷槩其行、機尤峭峻。人皆託廣福出此三導師。境以人顯矣。

②師薙染時、年二十一。澄曰、爾胡滯於此、蓋南詢乎。即束包下三峽、見別峰印、塗毒策於徑山、沈黙自究。一日、聞三庵顔語、脱然、有省。東遊見拙庵佛照禪師於鄮峰、一見、印可。自是往來、其門二十五余年、社中飽參、碩望、如用覺圓、覺無象、觀性空、印鉄牛、印空叟。忘年與交、若洪西山、淵清叟、銛朴翁、空聖輩、齒相若者、交敬畏之。

杖策走江西、訪諸祖遺蹟。有耆宿鑿仲温者、嘗掌大慧禪師之記。庵于蘿湖、纂所聞成書、發揮祖道。師

過焉、與之上三下其談論。肇大奇之、以下大慧居洋嶼、時一夏打禿、十三人、竹篋上付之。師翼焉。時鉄庵一主雪嶠、法席冠閩中。遂往挂錫。居無何、復之四明。而拙庵已上告老、請退鄧峰。歸東庵矣。接武者秀巖瑞命三師、居日記室。兩序皆拙庵所命。老龍象也。已而之靈隱、見松源岳、息庵觀。觀復命掌記。

③嘉泰三、出世台之般若、瓣香供。拙庵。火種刀畔、三年如二日。故人蓬山、以報恩讓、州命追而後從。英納爭附、叢林翕然。忽勇退歸、靈隱。衆請居第一座。竹巖錢德載、分教永嘉、拉遊雁蕩、名勝納交。尤見重於水心葉公。贈詩有、三反掀騰不動身之句。大參真西山、時為江東部使者。虛東林、招之以疾辭。復之武林、掃一室於飛來之北碚。梵書盈几、儵然。自怡者十年。人不以字稱、而以北碚稱之。起、應響之鉄佛。西余、常之顯慶。碧雲、蕙之慧日、衲子相從。於嘉爾利、閱二十年。吳興守右司劉朔齋、慨道場古刹、於庸緇攘奪。以師蔚為尊宿、聞于朝。平章喬公、謂是奉台公、給尚書省劄。

一年有、遷淨慈。亦平章公、所遴選也。歲侵、窘伏臘、水雲懂懂、無虛日。一坐六年、終老。不倦、飽私。靈隱欠員、京尹趙節齋、欲以例奏、師補處。師笑曰、吾日迫矣。乃拳三童癡絕、趣。④開二穴、於前住山月堂。昌禪師窳堵之側曰、吾持伴此老於那伽定中。賦二兩詩、見意有曰、函丈固宜、虛燕寢、附庸那復敢鴻溝。歲淳祐乙巳冬、示疾、謝医却藥、強而後從。

丙午三月二十八凌晨、從容、忽索紙書偈曰、平生無二伎倆、赤脚繞須弥。一步關二步、三更過二鉄圍。後有西月初一、珍重六字。呼諸徒使、前誠之曰、時不待人、以道以勵。吾世緣余二兩日耳。遺偈一落、紙已喧傳。皆不之信、且俟之。至期、味爽需浴。浴罷、若二飯寐然。視之已逝矣。遠邇道俗、薰香胆礼。三日、乃入龕。壽八十三、臘六十二、度弟子二百五十人、嗣法者未易數。

⑤師性端介、以退為進。嘉定間、廟堂銳意佛法、急於人材。執鼎望、禪席者、爭舉所知、附離者、掖而升。師絕不与之通、把弟拾二人所業。公論不可廢、樂推者不厭。初、何心於其間哉。寥寥、季運、老成典刑絕無、僅有機用如顏中菴、法才如甘露滅。其遊戲文翰、乃、轉調提唱。提宗綱之要、破學者之惑。樹二衛道之功、啓二未信之信。豈單見淺聞偏、勝獨得者所可議哉。或以識字、譏之、不直師一笑。平居、樂易慈符、敬老憐幼。尤急人之患難、悉力拯救。如不及至、其垂、款之際、先期書偈、不差毫髮。如返、故廬、如遊、園觀。生平所履、可駭於斯焉。中書直院程滄洲、以文尊之。略曰、睨南山、頂垂綸、千尺。湖水渺瀰、魚寒、不食。示病及期、體羸、神逸。維莫之春、參徒雲集。師頤而笑、吾婦有日。題四句、偈、妓為絕筆。及孟夏朔、泊然、入寂。師昔所證、本自綿密。末後一著、乃見真実。斯文蓋實錄也。有語錄外錄各一卷、判府右司劉公朔齋為序。已、錄梓行。外詩、文四十卷。已前行。統集一卷。既、遵治命、塔全身于三月堂之右。謹、次、第其事、遺

卷。既、遵治命、塔全身于三月堂之右。謹、次、第其事、遺

後人^{ホト}「有^{ナラ}以^テ考^ム。歲淳祐辛亥季春、客^{スル}北山靈隱^ニ嗣法小師大觀^{シテ}謹^ク狀^ス。」

- a 「謂是拳合公」ノ五字『物初贖語』（以下『物初』）ニナシ
- b 「歳」ノ字『物初』ニナシ
- c 「強而後從」ノ四字『物初』ニナシ
- d 「以」ノ字『物初』ニ「自」ニ作ル
- e 「宗綱」ノ字『物初』ニ「綱宗」ニ作ル
- f 「躍」ノ字『物初』ニ「掬」ニ作ル

この行状は大きく五つの段落に分けることができる（段落頭に番号を付した）。①段落には北碕の成人前の様子、②には修行時代、③には出世、④には示寂まで、⑤には北碕の性状や著作の整理状況等が示されている。また、人物関係もうまくまとめられている。①には親族と出家した寺院の僧侶、②には臨安で訪ねた諸師や交遊関係を結んだ禅僧、③には政治家と北碕との交流が明らかにされている。そこで、北碕居簡がどのような人物であったかを探ると同時に、彼と関わった人々は、一体どんな人物だったのかを考えてみたい。

(一) 成人前

まず、北碕居簡の名前に注目したい。「行状」にあるように、北碕は字ではなく臨安府（現浙江省杭州）武林の飛來峰の北側に建てた庵号である。さらに、『北碕文集』には「潼川北碕」（卷三「慶寧僧堂記 華亭」末尾）や「蜀人北碕居簡比

北碕居簡の文化的素地について（道津）

丘」（卷六「高秘閣金書経頌 並引」の引）といった自称がみえる。自称に地名を用いるのはよくあることだが、「潼川北碕」と記した文章には「紹定四年（一二三二）良月旦」、「蜀人北碕居簡比丘」と記した文章には「嘉熙元年（一二三七）二月初九日」の年記がある。つまり北碕が既に臨安に出世した後には書かれているのである。何故、出身を明記する必要があったのか。当時の政治が洛党（洛陽出身の政治家）と蜀党の二大勢力によって動かされていたことも考慮に入れるべきかと思うが、筆者はもっと単純な動機、つまり北碕の故郷に対する意識、成人前の印象の強さを考えるのである。

それでは北碕の故郷「潼川 通泉」とは、どのような土地柄であったのだろうか。現在の四川省射洪県の辺りと思われるこの一帯は、塩田と鉄鉱の街だったようである。『宋史』卷八九 志第四二 地理五には、

潼川府、緊、梓潼郡、劍南東川節度。本梓州。乾德四年、改靜戎軍、置東閣縣。（中略）乾道六年、升瀘南為潼川府路安撫使。崇寧戸一十萬九千六百九、口四十四萬七千五百六十五。貢綾、曾青、空青。縣十・郵、望。有三十四塩井。（中略）通泉、上。

有三鉄冶。（略）

とある。文中の「緊」や「上」は唐宋代の経済的規模で、望・緊・上・中・下というランクだった⁽¹²⁾。また、南宋の全国地理志で王象之が編纂した『輿地紀勝』⁽¹³⁾卷一五四 潼川府

路には、

縣沿革

通泉縣 上

在府東一百三十里。元和郡縣志云、本漢廣漢縣地。蜀記云、宋元嘉中、西宕渠郡。元和志又云、西魏恭帝、移於浦山、改名湧泉郡。隋開皇三年、廢郡改縣曰通泉、以同太子、勇名也。開皇十八年改、屬梓州。凶經云、縣東五里、定惠寺有泉、出於崇山之頂、經夏江、漲其泉。亦湧泉得名因於此也。

風俗形勝

（前略）梓於西南為大都。通泉於梓為名邑。江山明潤、土田平夷。紹聖四年通泉縣蓮繁閣記、楊天惠撰。（略）

と記述されている。この「名邑」の表現は文化面においてもいえる。例えば、唐代の詩聖杜甫が官を捨て放浪の果てにたどり着いたのは蜀であり、通泉県も訪ねている。『杜少陵詩集』卷一には通泉県に関する六首もの詩が収録されている。そのなかでも「通泉縣署壁後薛少保畫鶴」という詩に、筆者は興味を引かれる。「署」は役所のこと、薛少保とは薛稷（六四九〜七二三）のことである。彼の描いた鶴の絵は、の後世画家の鶴の基本形となった。

薛公十一鶴、皆寫青田眞。畫色久欲盡、蒼然猶出塵。低昂各有意、磊落如長人。佳此志氣遠、豈惟粉墨新。萬里不乏力、郡遊森會神。威遲白鳳態、非是

倉鷗隣。高堂未傾覆、常得慰嘉賓。曝露墻壁外、終嗟風雨頻。赤霄有眞骨、恥飲滄池津。冥冥任所往、脱略誰能馴。

この薛公の十一鶴は南宋代にも有名であったようで、当時の地誌、祝穆編『方輿勝覽』卷六十二 潼川府路 潼川府に引用されていることからもうかがえる。壁画は、鶴の産地である浙江省の青田県の様子とされるのが定説である。薛稷は従父薛元超が成都府路の簡州刺史に左遷されたとき共にあったかもしれないが、その時通泉県に入り鶴を描いたといった記録はない。当時の壁画は取り外して移動させた事実があり、どこかで描かれた作品をはめ込んだものかもしれない。また、潼川府内の寺院にも壁画が描かれ、題材は仏画に限らなかつたようである。例えば『輿地紀勝』卷一五四には、寧国寺 在中江縣。寺壁畫仙官撫琴拍手。則壁中有声。とあるなど、潼川府は文化面、特に筆者が興味のある絵画史においても注目するべき場所と思われる。

北碚居簡は、この故郷潼川とどのようなつながりを持っていただろうか。『北碚文集』に収録される四十四篇の「記」の中で、潼川府路の寺院について七つの記述がある。

九龍山重修普澤寺記・喜祥樓記 通泉・澄心院藏記 通泉（以上卷三）・澄心寺華嚴閣記 通泉・通泉廣福院記・西亭蘭若記・塩亭藏經記（以上卷四）

そのうち、通泉県の寺院が四つも記載されていることは特筆すべきであろう。「行状」にみられる北禰の出家した廣福院については、こう記されている。

通泉廣福院記

廣福皇覺院、制度小而最古、翠屏諸峯、皆掃彈壓。輪藏鐘閣、普門内院、復道翼翼、巋然門闥、立二教級之上。煥燦照耀、靡不華好。古殿再新、諸莊嚴事、如開眉目、如被錦繡。又如李郭一交、旗幟、十倍精明。紹榮倡於前、祖因・法一・紹榮・惠燈各致其力、相與應和、成此殊勝。法深・宗鑑遠掃、自南、屬、初重門、兩、盡其巧。跨、以東、幢刹鮮麗、典午渡江、時異僧來、此、勦荒榛、斬蓬蘺。草衣木食而大有為、十數傳、後稍弛、隣邑惠門蘭若思靜再振、於唐之中葉。迨今鐘梵薄雲天、當一方宅心純想、進善悔過之地、吾廬距、此、僅一舍、淪棄江海、足跡未始至。端平改元秋、鄉州某寺僧移書、訪問生死、屬予紀歲月。噫、幾千年矣。世界有千年之國乎。歷年之多、莫如三代。夏商之曆莫如周。周之季建、空名、揣揣、立於地。大衆富強、有力。諸侯之上、年不加少。豈能尽八百之曆哉。揆之操、瓊巧、者之言則百年之家、亦復無有。然則樹、利於深山邃谷、更歷如此。其久、獨何如。由吾師淑諸徒、以戒定慧、為之主。慈忍精進、為之張。正心誠意發其用、以遊人間世。利己利物、以成厥志。後世雖未必、盡聞、聞者不自棄、自棄者虐也。明者不矜衛。矜衛者賊也。故能通神明、行、久於

北禰居簡の文化的素地について(道津)

其道、而綿世守。若夫焚蕩於強暴、毀斥於雄罵、如風吹花、如刀截風、持危扶顛。以大比宗、以承厥終。

〔北禰文集〕卷四)

a 「花」ノ字ハ成實堂本・東洋文庫本ニ「光」ニ作ル

この寺院について現段階では、同時代またはそれ以前の記録がみあたらず、非常に残念だが、清代の『光緒射洪縣志』卷之三 輿地編寺觀に次のような記載があるので参照したい。

宝勝寺、縣西南六十里。乾隆二十六年補修。旧志、宋熙寧間更名聖壽寺、勅賜廣福院。元延祐間、僧會安重修。明成化二年僧圓正重修、易今名。

県の西南とは、清代の射洪県の位置から西南をみるわけだが、方角としては、旧来の通泉県の範囲内だろうと考えるのである。なぜならば確実に通泉県にあったはずの慧普寺(18)について同書は、

慧普寺、即聖壽寺。縣南七十里。梁大同中建。唐薛少保稷大書慧普寺三字。又名善慶寺。今廢。

と記し、通泉県の位置を南方と示唆しているからである。また、唐代の蜀の画史『益州名畫錄』卷中 孔嵩章に「廣福院」という寺院名がある。そこには孔嵩の描いた龍があり、文中では唐末五代に一世を風靡した黄筌・黄居寀父子の龍と

比較されている。残念ながら北碚の廣福院と同一である確証はないが蜀人の眼に絵画が触れる機会が多かったことは確認できる。

寺院と同様、北碚と蜀との密接なつながりを考えることのできる事項として、蜀出身の弟子が多く確認できることが挙げられよう。

① 『北碚文集』……石楼序||石楼普明〔文中に通泉と明示〕

(巻五)・勝叟銘 潼川定首座||勝叟自定・無尺銘 潼川藏知

客||無尺□藏・示照藏主 普州||鏡潭□照(以上巻六)・祭

源上人 郷人・代祭興上座 郷人・祭勤浄頭 通泉・祭主

侍者 圭羅漢通泉||羅漢□圭(以上巻十)

② 『北碚外集』……擬寒山送明達二侍者帰蜀・送定上人帰潼

川・送融副寺帰潼川・示僧 成都

この中でも特に筆者が注目しているのは鏡潭照藏主である。

『北碚文集』巻六の「示照藏主 普州」には、

半山老人説游俠傳、謂全萬卷云、將此身心學佛菩薩、
 何難之有。殆不知、學佛菩薩之與游俠、易地皆然。
 概而言之則可。扼實理論則適。越而北轍。除是生而
 知之、方有少分相應。自無愛樹下周行。七步、目顧四方、
 已是學而知之。鏡潭藏主語別、令羊以諸方納粟・將
 仕・校尉・禪師。且道它學什麼人。

と記されている。「語別」とは別れに望んで話すという意味であり、鏡潭は北碚在世中に蜀に帰郷したらしい。『物初贖

語』巻一にも「送鏡潭帰蜀」の文章があるように、北碚の弟子の間でも有力な人物だったのでないかと思われる。同時に納粟(富豪)・將仕(官吏)・校尉(官城警護隊長)といった面々とも交流があったこともうかがえる。そして、彼は絵を描く人でもあった。

書鏡潭照藏主水墨草蟲

鏡潭照草蟲、水墨出奇。便覺蘭陵畫手、風斯在下。當如下

伯榮相馬、取其神駿、遺其牝牡玄黃。(『北碚文集』巻七)

北碚居簡撰述の書物から、蜀の寺院と弟子について考えるとき、北碚の故郷「潼川 通泉」への思い入れの深さを筆者は感じるのである。この土地は、絵画をはじめとした芸術・文化に接する機会が望める場所であり、そうした文化的な影響は、北碚が故郷を離れた後も蜀出身の弟子によって、断続的にもたらされたのではないだろうか。つまり、北碚の文化的素地の一つに、出身地の影響をあげるのである。

(二) 修行時代

この段落に登場する多くの禅僧は、伝記がはっきりしない。筆者の整理状況も不十分なので、現在確認できるところまでを表にしておくにとどめたい。なお、参考文献欄は『宋人伝記資料索引』と石井修道氏「十一種宋代禅門隨筆集人名索引」上下・同氏「中国の五山十刹制度の基礎的研究」(20)

より抜粋している。

行状	姓	名	北 碓 文 集 等 の 記 述	参 考 文 献
別峰印	別 峰	寶 印 (二〇九〜二九一)	礼別峰塔(外集)	渭南文集 卷一八・二三・四四 補統高僧伝 卷一〇
塗毒策	塗 毒	智 策 (二一七〜二九二)		叢林公論 卷上 叢林盛事 卷上 枯崖和尚漫録 卷上・下 渭南文集 卷二二 攻媿集 卷八一・一一〇 補統高僧伝 卷一〇 新統高僧伝集 卷一三
卍庵顔	卍 庵	道 顔 (二〇九四〜二一六四)	跋卍庵法語(文集卷七)	嘉泰普燈録 卷一八 雲臥紀譚 卷上 禅林寶訓 卷三 叢林盛事 卷上
用覚圓	覚	圓 □ 用		径山無準師範行状
覚無象	無 象	□ 覚	臨海尼如奉求僧疏覚無象族人(文九) 祭覚無象以淵清叟配(文十) 代覚無象統緒衾吟謝楼大參(詩集卷二) 後中秋夕同淵清叟宗無伝登覚無相(象カ)宿蟾小閣(詩二) 覚無象姪湛沙弥求僧(外) 尼童携無象書求疏(外)	
観性空	性 空	□ 観		径山偃溪佛智禅師塔銘 枯崖和尚漫録 卷中
印鉄牛	鉄 牛	心 印	請印鉄牛住靈隠茶湯榜(文八) 鉄牛住靈隠疏三首 石橋住浄慈同法嗣(文九)	

秀巖瑞	鉄庵一		瑩仲温	空聖子		銛朴翁		淵清叟	洪西山	印空叟	
秀巖師瑞	鉄庵宗一		仲温 瑩	聖子 □ 空		朴翁 義 銛		清 叟 □ 淵	西山 □ 洪	空 叟 宗 印	
祭佛照禪師圓鑑之塔代秀巖(文十) 送澁麟二兄之授子見秀巖(外)				空聖子哀辭 并引(文十)		両窮伝(文五) 祭葛無懷 朴翁(文十) 酬銛朴翁梅花 四首(詩二) 朴翁加冠巾蘇召叟訝予不嘲之(詩二) 朴翁約効誠齋分題得月色(詩三) 葛無懷計(計カ) 至銛朴翁(詩四)		代佛照祭淵清叟(文十) 祭覺無象以淵清叟配(文十) 後中秋夕同淵清叟宗無伝登覺無僧宿蟾小閣(詩二)		杜防御為鉄牛幹塔亭(外)	
育王笑翁禪師行狀	枯崖和尚漫録 卷上・中	叢林盛事 卷下	雲臥紀談 羅湖野録 序・跋 雲臥紀譚 序・書 叢林盛事 卷上 人天寶鑑			叢林盛事 卷下		径山無準禪師行狀		径山無準禪師行狀 枯崖和尚漫録 卷上	

松源岳	松源崇岳 (1133~1101)		松源和尚語錄 叢林盛事 卷下 枯崖和尚漫錄 卷中 佛祖歷代通載 卷二〇
息庵觀	息庵達觀 (1138~1122)	天童山息庵禪師塔銘(文十)	叢林盛事 卷上 枯崖和尚漫錄 卷中 育王笑翁禪師行狀
蓬山聡	蓬山永聡 (1161~1125)	金山蓬山聡禪師塔銘(文十) 与応真遇代蓬山見水心侍郎(詩三) 移棕閩次蓬山兄韻(詩三)	

現在のところ『北碕文集』等以外に資料の存在を確認できない禅僧に関しては、特に同資料の精読が今後の第一課題である。資料が少ないだけに文化面をうかがうことは難しいのが現状なので、本稿では保留としておきたい。

(三) 出世

北碕居簡の文化的素地を展望するには、出世後の多くの文人・政治家たちとの関係を考えることも不可欠であろう。「行状」には士大夫六人の名が列挙されている。『北碕文集』・『詩集』・『外集』・『続集』に掲載された詩文の題名を付せば、彼らと北碕との関係の濃淡がよりはっきりとみえてくるのではないだろうか。

① 錢徳載(未詳)……号竹巖孀翁。『北碕文集』卷七の「跋常

北碕居簡の文化的素地について(道津)

熟長錢竹巖詩集」から『竹巖詩集』を発表し、嘉定紀元(一一〇八)に常熟の長(県令か)だったことがわかる。『竹巖詩集』は不明。六人の中で北碕と最も親しくしたようである。

△北碕文集▽「竹巖錢徳載畫像贊」・「叩竹杖銘 叩端歛尺 為竹巖先生錢常熟策」・「肖巖銘 竹巖長子」・「東坡画像贊 竹巖家藏」・「二桃殺三士贊 竹巖家藏」(以上卷六)・「跋常熟長錢竹巖詩集」(卷七)・「祭錢竹巖」(卷十)
 △北碕詩集▽「曠齋 其子与升岩同改秋属竹岩索賦」(卷一)・「錢竹岩之官清遠」(卷二)・「送錢竹岩宰常熟」・「長門怨 代錢常熟」・「代竹岩送史侍郎」・「寄漫塘劉平国索竹岩錢徳載挽章」(以上卷三)・「和竹岩游虎丘」・「九日姑蘇台躋

盧蒲江趙靜齋竹岩諸名勝」（以上巻四）・「竹巖賦孫谷橋墻間
凶人徒知猷諛可在竹巖取定諛者併按」・「泣錢長官竹岩」
（以上巻五）・「代人挽竹岩錢長官」（巻六）

②葉適（一一五〇～一二二三）……字は正則、温州永嘉の人。水
心先生、淳熙五年（一一七八）に進士。太常博士に叙せられ
るなどの学者であり、浙西地方の節度使を経て、権兵部侍

郎・権工部侍郎を歴任。著書に『水心先生文集』⁽²¹⁾ 二九巻。
宋史巻四三四（列伝一九三）儒林四に伝記がある。なお、物
初大観の指摘する「六反掀騰不動身」の句は、椎名氏の指
摘によって「水心先生酬北碕詩帖」とわかる。

△北碕詩集▽・「酬水心葉待制見寄宿覺庵記并記」（巻二）
「與応真遇 代逢山見水心侍郎」（巻三）・「謝葉文昌二
首」（巻四）

③真徳秀（一一七八～一二三五）……字は景元、後に希元と改
名。号西山先生。慶元五年（一一九九）に進士。翰林学士、
参知政事などを歴任した政治家であり、朱子学者。主著に
『西山文集』⁽²¹⁾ 『読書記』等。宋史巻四三七（列伝一九六）儒
林七に伝記がある。

△北碕文集▽△詩集▽等に記載は見あたらない。
④劉震孫（一一二六）……字は長卿、号は朔斎。東平の人。
喬行簡の部下として活躍。『後村大全集』巻七一・『文山全
集』巻一〇等に記述がある（『宋人伝記資料索引』参照）。

△北碕和尚語録▽巻首に題文を書いている。その他の史料
については検索中。

⑤喬行簡（一一五六～一二四〇）……字は壽朋。東陽の人。紹熙
四年（一一七七）に進士。参知政事、知枢密院事を経て嘉熙
年間に平章軍国重事。著書に『孔山文集』等。宋史巻四一
七（列伝一七六）に伝記がある。

△北碕文集▽「幻庵銘」（巻六）中に名前
△北碕詩集▽「謝喬丞相」（巻九）

⑥趙與憲（一一七九～一二六〇）……字は徳淵、号は節斎。太祖
十世の孫。嘉定十三年（一二二〇）進士。平江府の知事な
ど。宋史巻四二三（列伝一八二）に伝記。弟與懃は『圖繪寶
鑑』巻四に伝記があり、墨竹をよくすることがわかる。

△北碕文集▽△詩集▽に「趙」氏の記述が数点あるが、特
定は難しい。

彼らはいずれも、政治の中心的人物ばかりであり、北碕居
簡のあらゆる面に大きな影響を与えたと思われる人々であ
る。また、これほどの大物との交渉を記すのは、物初の「師
の権威づけ」といった別の意図があったのではないかと疑
わせる。文化的素地の話に戻せば、現存する②葉適『水心文
集』・③真徳秀『西山文集』等には、絵画に対する詩文がみ
られないことから、絵画需要の面を考える上では、両者と北
碕の関係はあまり密接とはいえないと思われる。（ただし、筆

者は文化イコール絵画と考えているわけではなく、文化の一現象として絵画を捉えているのである。それでは一体、北碕に影響を与えた文人は誰か。行状の六名だけでは不充份であり、多くの人名を『北碕文集』をはじめとする資料から拾い上げ、考察しなければならぬことを痛感するのである。

四、おわりに——今後の課題——

南宋代の絵画史研究に対し、多くの問題点があると考え、筆者は、まずその根底として引きずっている「禅宗文化」という言葉にとらわれ過ぎていないかと思うのである。そこで、文化方面に造詣が深かったと思われる北碕居簡などを具体例として、「禅宗文化」とは何かを認識してみたいと考えている。その基礎研究の第一歩として、今回北碕の行状について検討を試みたのだが、得られたものは結論ではなく、課題の山であった。

北碕にとって、蜀の文化が絵画に興味を持つ遠因となったのではないかと考えたのは、自称の問題と共に、蜀の禅僧として有名な睦堂慧遠（一一〇三～一一七六。眉州眉山出身）や、北碕と同時代人の石田法薫（一一七一～一二四五。眉山出身、年回りとしては弟子あたりの環溪惟一（一二〇二～一二八一。資州墨池出身）、日本に大きな影響を与えた無準師範（一一七八～一二四九。劍州梓潼出身）等の語録に、絵画に対する題跋詩

北碕居簡の文化的素地について（道津）

文が多く見受けられることにも起因している。今回の考察で、絵画史研究においても、南宋蜀文化の検討が必要なことを再認識した。また、出世後に出会った文人たちについては、行状に依るより寧ろ『北碕文集』等の記述に依拠してみたいかなければならないことがわかった。さらに、修行時代については、まず資料収集とその精読が必須課題である。これらの総合によって、筆者は北碕居簡の文化的素地がみえてくると考える。そして、この素地をもって営まれる文化的活動、つまり北碕ならば文筆活動によって生まれる現象・作品が「禅宗文化」の一例なのである。この「禅宗文化」が、果たして「禅宗」の語を冠するべき特殊な文化であったのかは、細心の注意を払って考察しなければならない。これらをもまえて絵画史研究を行ったとき、筆者は宋代の絵画の歴史をもっと多元的・立体的にみる事ができるのではないかと期待するのである。

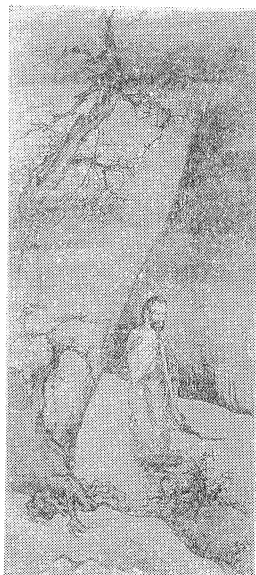
註

- (1) 『圖繪寶鑑』は、元 夏文彦撰の画史。自序より至元乙巳（一三六五）成立とされる。全五巻と補遺一巻で構成され、巻一に画論、巻二～五は、三國時代～元代までの画家伝及び外国の画家伝が記される。画史のダイジェスト版として、日本にも早くから伝わった。『叢書集成 新編』第五三冊より引用。

北朝居簡の文化的素地について（道津）

(2) 「精妙之筆」と分類される作品には、以下のような例を挙げるが多い。

「出山釈迦図」……絹本墨画。日野原節三氏所蔵

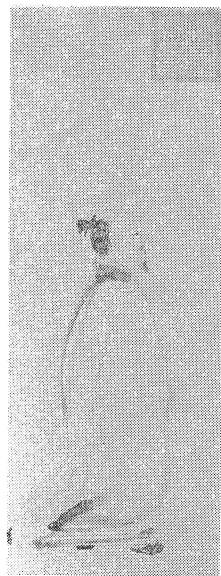


「雪景山水図」……絹本墨画。東京国立博物館蔵

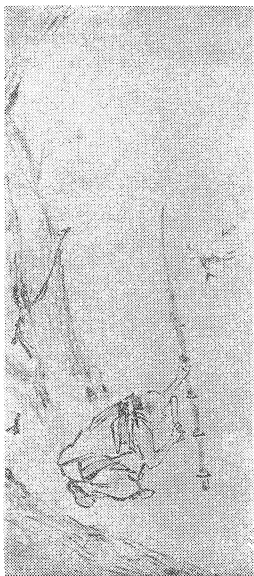


二四六

「減筆」と分類される作品には、以下のような例がある。
「李白吟行図」……紙本墨画。東京国立博物館蔵



「六祖截竹図」……紙本墨画。東京国立博物館蔵



いづれも『中國繪畫史』中之二（鈴木敬著 吉川弘文館）より転載。

(3) 李公麟（一〇四九〜一一〇六）は、字を伯時、自号を龍眠居士とする士大夫である。多くの特技をもつ彼は、書家であり、画家であり、詩人であり、また古美術鑑定の権威でもあった。彼の画風は、後に「白描」と呼ばれる細密画である。特に人物画において後代に大きな影響を与えたといえる。

『宋史』卷四四に伝記、『宣和畫譜』に伝記及び作品が記載されている。『中國繪畫史』上（鈴木敬著 吉川弘文館

昭和五十九年）三〇八頁）「李公麟」章にくわしい。

(4) 『中國繪畫史事典』（王伯敏著 遠藤光一訳 雄山閣 平成八年）二二七頁）「梁楷」章より抜粋

(5) 『水墨美術体系』 牧谿・玉潤（講談社 昭和四十八年）

戸田禎佑氏「牧谿序説」四七頁の取意。原文は次の通り。

梁楷の「減筆体」の成立は、梁楷をその師、賈師古を仲介とする李公麟系（白描画）の画家をみるだけでは説明できないのであって、禪僧とも交遊関係のあった彼の作品には、おそらく、そこで流行していた造形理念の直接的反映があったとみるべきであろう。

文中「流行していた造形理念」とは、禪僧であり画家であった智融（未詳）の「罔兩画」である。これについては、島田修二郎氏「罔兩畫」上下（『美術研究』第八四・八六号 美術研究所 昭和十二・十四年）参照。

(6) 梁楷の画風が時間を伴って変化するという学説の成立に対して川上涇氏は伝記の変化を原因として挙げている。川上氏は『南宋院畫錄』卷五（清 厲鶚）に「……賜金帶、楷不受、挂于院内而去。」とあるのに着目し、金帯を受けずに画院を辞職し、以降方外の土と交わり、墨画の世界に沈潜したと解する説が成立したことを指摘して、この認識の後代成立を示唆した（川上涇氏「梁楷・因陀羅序説」『水墨美術体系』4所収）。しかし林秀薇氏は、『圖繪寶鑑』とはほぼ同時代に

北碕居簡の文化的素地について（道津）

成立した宋濂（一三二〇～一三八一）の『宋文憲公全集』巻十八に「梁楷義之猥獨揚跋」の文を見出し、同書が「圖繪寶鑑」と同じ出典に基づいたのは明らかだと述べている（『梁楷研究序説』『東京大学 東洋文化研究所紀要』一一七号 平成四年）。同文は

梁楷、東平相義之後、善畫人物・鬼神、學於賈師古。宋寧宗時、為畫院待詔、賜以金帶不受、掛於院中而去、君子許有高人之風。或者、但知其筆勢猷勁、為良画師、且又謂其師法李公麟、皆誤矣。

と書かれ、『南宋院畫錄』と同様「而去」の文字を付していることがわかる。おそらく、この問題の解決にはいまま少しの時間を要すると思われる。

(7) 『北碕詩集』は、駒澤大学図書館蔵の写本に依っている。『北碕文集』は『禪門逸書 初編五』を底本に、成實堂文庫所蔵本、東洋文庫所蔵本の訓点を参照している。また、『北碕續集』は『北碕外集』と合本になった竜華院本の影印に依っている。なお、これらの書誌学的考察は、椎名宏雄氏「北碕と物初の著作に関する書誌的考察」（駒沢大学仏教学部研究紀要）四六号 昭和六十三年）になされている。同論文の所在は駒澤大学教授石井修道先生よりご指導いただきました。

(8) 前掲川上氏論文三九頁に指摘される。

(9) 本文の「贈御前梁官幹」の他、『北碕文集』巻六に「罔曠賛并引」、『北碕詩集』巻六に「題張於潛画軸五首」中の「梁

楷 寒山拾得・夜潮図・煎茶図」の三首、同巻七に「梁楷画鐘(鍾カ) 檀並引 鶴帰雲際携琴過澗西三題」の六点の詩文が所収されている。

- (10) 拙稿「『北碕集』にみられる樓鑰の文化的影響に関する一考察」(『宗学研究』三十九号 曹洞宗宗学研究所 一九九七年) 参照。

- (11) 『物物贖語』所収本の伝記については、駒澤大学助教佐藤秀孝先生よりご指導いただきました。

- (12) 『宋史』巻一五八 志第一一一 選舉四に以下のように書かれている。

旧制、畿内県赤・次赤、畿外、三千戸以上為望、二千戸以上為緊、一千戸以上为上、五百戸以上为中、不滿五百戸为中下。有司請甄諸道所具板図之数、升降天下県、以四千戸以上為望、三千戸以上為緊、二千戸以上为上、千戸以上为中、不滿千戸为中下。

- (13) 宋 王象之編『輿地紀勝』は全二百巻の地理総志で、南宋の行政区に準じて編成される。各篇には、州沿革・縣沿革・風俗形勝・景物・古迹・官吏・人物等の章分けがされている。参照したのは、中華書局本である。

- (14) 杜甫(七一二〜七七〇)が官位を捨て成都に入ったのは、四十八歳の時である。当時の節度使の保護を受け、比較的安定した生活の中で、通泉県に赴き六首の詩を残している。参照したのは『杜甫全詩集』第二巻(『統国訳漢文体系』鈴木虎雄訳 日本図書センター 昭和五十三年)である。

- (15) 薛稷は字を嗣通という。唐代の二大書家虞世南・褚遂良を師として書を学ぶ。太子少保にまで昇進するが、玄宗皇帝に對するクーデターの容疑で獄死する。(『旧唐書』巻七三 列伝第二三・『新唐書』巻九八 列伝第二三参照) 絵を描くことについては現存最古の画論書、唐 張彦遠『歴代名畫記』巻九に、鶴を描いて有名となり「屏風六扇の鶴様は稷より始まるなり」と記されている。筆者は長広敏雄訳の東洋文庫本『歴代名畫記』(平凡社 昭和五十二年)を参照している。また薛稷の鶴図については小川裕充氏「薛稷六鶴図屏風考」(『東京大学 東洋文化研究所紀要』一一七 平成四年)にくわしい。

- (16) 前掲『歴代名畫記』巻三 記兩京外州寺觀畫壁に 會昌五年、武宗毀天下寺塔。兩京各留三兩所。故名畫在寺壁者、唯存一二。當時有好事。或揭取陷於屋壁。已前所記者、存之蓋寡。先是宰相李德裕鎮浙西、創立甘露寺。唯甘露不毀、取管内諸寺畫壁於寺内。とあり、會昌の破仏のときに諸寺院の壁画を甘露寺に移動させたことと明記されている。

- (17) 『光緒射洪縣志』は光緒十年(一八八四)に刻本された地方志である。『中国地方志集成』二〇(四川府縣志輯 巴蜀書社 一九九二年) 五三一頁参照。

- (18) 前掲『輿地紀勝』巻一五四 潼川府路 潼川府 碑記章に 唐薛稷書懸普寺 稷道衡之孫、魏鄭公之甥也。以書名天下懸普寺三寺。方徑三尺筆畫雄健。在通泉壽聖寺聚古

堂。

とあることから本文のように記述した。

- (19) 黄休復撰『益州名畫録』は、宋景徳三年(一〇〇六)に李旼の序が付された、蜀に関する画史。蜀人の画家・入蜀した画家の伝記と、蜀に作品のある画家の伝記が綴られる。孔嵩章の部分は以下の通り。

孔嵩者一名景、蜀人也。(中略)圖畫甚多、人皆寶之。

黄筌於石牛廟畫龍一堵、黄居宬於諸葛廟畫龍一堵、嵩於廣福院畫龍一堵。(略)

- (20) 『宋人傳記資料索引』は、昌彼得他編 鼎文書局 一九七八年出版。石井氏「十一種宋代禪門隨筆集人名索引」上下は『駒澤大学仏教学部研究紀要』第四十二・四十三号にて昭和五十九・六十年に発表された論文、「中国の五山十刹制度の基礎的研究(三)」は『駒澤大学仏教学部論集』第十五号にて昭和五十九年に発表された論文である。

- (21) 『水心先生文集』・『西山先生真文忠公文集』・劉克莊撰『後村先生大全集』・文天祥撰『文山先生全集』は、四部叢刊集部所収。

- (22) 椎名氏論文は(7)参照。『禪門逸書 初編四』所収の『北磻詩集』巻頭にも付されている。ただし、『水心先生文集』には、掲載されていないようである。以下に全文を挙げる。

(句読点は椎名氏論文に依拠する)

水心先生酬北磻詩帖

奉酬孝堂頭禪師 竜泉葉適

北磻居簡の文化的素地について(道津)

簡師詩語特驚人、六反掀騰不動身、説与東家小兒女、塗紅染緑未禁春。新詩最佳、三腹媿歎、然有一説、不敢不告。林下名作、將以垂遠、不可使千載之後、集中生日詩。此意幸入思慮、何時共語、少慰孤寂。

適

〔追記〕本稿は、駒澤大学教授石井修道先生のご配慮、ご指導により完成をみました。ここに紙面をお借りして感謝の意を表します。また、同助教授佐藤秀孝先生・同小川隆先生にもご指導賜りましたことを御礼申し上げます。さらに、同大学院の千葉正氏・岡本一平氏より多くのご助言をいただきましたことを末筆ながら記し謝辞に代えたいと思います。